

## 審査の結果の要旨

氏名 蝶 慎一

高等教育のユニバーサル化に伴い今日、学生支援への関心は大きな高まりをみせているが、その淵源は戦後初期の厚生補導まで遡ることができる。戦後の厚生補導は、米国の影響を受けつつ形成・展開したものであり、その史実を明らかにする意義は大きい。本論文は、米国占領下の1949年から占領後の1958年までの約10年間を対象とし、厚生補導に関わる講習・研修の内容・実態および基準・答申の審議過程に着目し、戦後の我が国の厚生補導の形成過程を、一次史料の分析を通して明らかにしようとしたものである。

序章では、先行研究をレビューし、一連の戦後改革研究や厚生補導の歴史的研究、学生相談・生徒指導に関する研究を検討した結果、新制大学発足期における厚生補導について、日米の一次史料に基づく歴史的・実証的な研究が乏しいことが示される。その上で、各種の講習・研修という実践面、大学基準や学徒厚生審議会答申という制度面という2つの次元と、厚生補導の理念、活動領域、その展開・普及に携わった関与者という3つの検討対象からの考察という枠組が提示される。続く第1章では、収集・分析した一次史料について、米国側史料と日本側史料の別に、発掘・収集のプロセスや概要が述べられる。

第2章では、「IFEL厚生補導部門」の実態・内容を考察し、米国人講師を中心に全人教育という理念とそのための多様な活動領域が示されていたこと、その後の研修・研究会等で指導的な役割を果たしたり大学で実践のコアとなる人材が参加し、新制大学で厚生補導を担う実務・実践者や政策関係者の養成機能も果たしていたことが解明される。続く第3章では、「厚生補導研究会」の実態・内容を分析し、学生の助言や補導に関わる研究が、引き続き米国人講師と日本人講師の双方によって多数の受講者を集めて実施され、そこで講師・受講者が、将来的に研究者や政策関係者となって活躍していくことが示される。

第5章では「補導職員研修会」、第6章では「厚生補導特別研究会」の実態・内容が検討される。「補導職員研修会」は、これまでの成果から日本人のみでの開催、という趣意文にあるように、日本人のみで行われた研修会で、日本人助言者という、講師とは異なる新たなカテゴリーも誕生していたことが、また「厚生補導特別研究会」は、啓蒙を越えて専門的な知識・技術を備えた補導職員の育成をはかるため、日本人講師の充実はもちろん米国人講師も招くことで、実践者だけでなく学者・研究者も参加し、厚生補導をめぐる理解や実践が、研修から研究へとある意味で発展的な段階を迎えていたことが実証される。

第4章と第7章では、1951年の大学基準に厚生補導条項が盛り込まれる過程ならびに学徒厚生審議会による1958年答申の審議過程が描かれる。前者は、1950年初頭は厚生補導をめぐる研修会が並行実施され、その内容をめぐる模索的議論が行われていた時期であり、具体的内容には触れず専任機関を設けるというシンプルな条項になった過程とその意義を、後者は、実務者や米国の状況にも明るい研究者が「厚生補導組織部会」を構成し、厚生補導に関わる14の具体的な活動領域を提示するに至った過程を、それぞれ明らかにした。

本研究は、戦前との関係性や米国の視点からのアプローチなど、十分に検証できていない部分も残るが、新制大学発足期の厚生補導の受容・展開に関して、日米の一次史料を発掘して丹念に考察し、主に日本側の視点から厚生補導の形成過程を、従来にはなかった関与者という視点も組み込みつつ実証的に明らかにした点で、特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。